

「教職キャリア形成 I・II」の現状と課題

長友 義彦・霜川 正幸・高橋 雅子・南浦 涼介
藤上 真弓・静屋 智・前原 隆志

The Current State and Issues of the Courses of “SchoolTeacher's Carrier Formation I&II”

NAGATOMO Yoshihiko, SHIMOKAWA Masayuki, TAKAHASHI Masako, MINAMIURA Ryosuke,
FUJIKAMI Mayumi, SHIZUYA Satoru, MAEHARA Takashi

(Received January 6, 2016)

キーワード：学校体験、教職スタンダード、教員養成

はじめに

近年、社会環境の急激な変化、価値観の多様化を反映して学校教育を巡る様々な課題が明らかになってきた。こうした課題への対応のために、優れた資質能力を備えた魅力ある教員が必要とされている。まさに「教育は人なり」といわれるように、学校教育の成否は、教員の資質能力に負うところが極めて大きい。しかしながら、団塊の世代の大量退職により学校現場におけるベテラン教員が激減し、若年教員が急増することによる教育の質の低下への懸念がある。教員は学校現場における実践の中で、経験豊富な先輩教員から経験の少ない若手教員へと知識・技能が伝承されて資質能力の向上が図られてきたという側面がある。したがって、若年教員を指導するベテラン教員の減少は、教育の質の低下と結びつくと考えられている。

こうした背景から、教員の資質能力の育成を現職研修にのみ依存するのではなく、大学における教員養成、採用、現職での研修を体系的に整えることによって、教員の資質能力の育成を図る方向が打ち出された。

本稿では、教員に求められる資質能力を概観し、本学で実施された教職スタートカリキュラムである「教職キャリア形成 I・II」ではどのような資質能力と関係したかを分析していく。

1. 教員に求められる資質能力

1-1 答申にみる教員の資質能力

教員の資質能力について教育行政ではどのように捉えているのか、答申を中心に整理していきたい。

教育職員養成審議会「教員の資質能力の向上方策等について（答申）」（1987年12月18日）において、「教員については、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である。」としている。同審議会による第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（1997年7月28日）では、養成段階において教員が習得すべき資質能力の水準として、「教科指導・生徒指導に関する『最小限必要な資質能力』」を示した。続く、第三次答申「養成と採用・研修の連携の円滑化について」（1999年12月10日）では、各大学が養成しようとする教師像を明確化すること、それを達成するための組織及びカリキュラムの編成、大学教員が自分の専門の授業単位と教員養成の関わりを考えた授業を実施することを求めた。

また、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方」（2006年7月11日）においては、大学に養成段階で身に付けるべき最小限必要な資質能力を明確にするとともに、必修科目「教職実践演習」（仮称）の新設を提言している。（2010年度入学生から実施）。

さらに、中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」

(2012年8月28日)では、教員に求められる資質能力として次のように示された。

- (i) 教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）
- (ii) 専門職としての高度な知識・技能
 - ・ 教科や教職に関する高度な専門的知識（グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む）
 - ・ 新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探求型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力）
 - ・ 教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力
- (iii) 総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）

このような行政の動きと連動して、各大学・学部では、養成課程で身につけるべき資質能力を具体的に示す「教員養成スタンダード」を策定する動きとなった。

おって、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015年12月21日)では、これまで提言されてきた教員が備える資質能力を「教員として不易の資質能力」としたうえで、これからの時代の教員に求められる資質能力として次の三点を示した。

- ・ 自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である。
- ・ アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道德教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量を高めることが必要である。
- ・ 「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要である。

このように教員に求められる資質能力を示し、教員を高度専門職として改めて位置づけるとともに、教職生活全体を通じた職能成長の観点を重視している。

これらを踏まえ、学部・学科段階における養成を「教員となる際に必要な基礎的・基盤的な学修」と位置付けている。

1-2 「教職スタンダード」の策定

学部・学科で身につける「教員となる際に必要な基礎的・基盤的な学修」とは何か。この点について、別惣は、戦後の教員養成教育が抱えてきた問題が今もなお克服できずに残っている現状があるとして、次の三つの課題を指摘している)。

第一の課題は、大学・学部で最終的に学生に身につけさせたい「最小限必要な資質能力」を明示していなかったこと、第二の課題は、大学の養成カリキュラムが教員としての資質能力形成にどの程度有効に寄与しているのかという実態が明らかにされてこなかったこと、第三の課題は、養成するためのカリキュラム全体をどのように捉え、カリキュラムをどのように構成すればよいのかについて全体的な目標を欠いていたことである。

こうした中、各大学では養成段階で身に付けるべき最小限必要な資質能力を策定しているが、その到達目標の内容・領域区分については三つのグループに類別できるとしている)。

- ① 教員養成段階において教員として必要な資質能力の内容をリスト化しいくつかの領域で構成(福島大学人間発達文化学類、横浜国立大学人間科学部など)
- ② 中教審答申(2006年7月11日「今後の教員養成・免許制度の在り方」)に示された「教職実践演習」の「到達目標及び目標到達の確認指標例」に準拠した到達目標を設定し、それに基づいたルーブリックを策定(上越教育大学、琉球大学教育学部など)
- ③ 教員として必要な資質能力という大学4年間のトータルな到達目標の内容・領域区分だけでなく、

授業実践力に特化した評価スタンダードの作成（鳴門教育大学）

また、兵庫教育大学ではこれらを踏まえ、小学校教員に特定した「小学校教員養成スタンダード」を開発している（表1）。

表1 教員養成スタンダード（小学校版）

大領域	下位領域	資質能力	
学び続ける教師	省察の実践	1 常に自らの学びを省察し、課題を見つけて改善することができる。	
	研究を通じた専門性の向上	2 研究活動を通じて絶えず自らの専門性の向上を図ることができる。	
	長期的視野に立つ職能成長	3 長期的視野に立つて、自らの職能成長を図ることができる。	
教師としての基本的素養	社会人としての素養	4 言葉遣い、挨拶、礼儀、マナーなどの社会人としての常識を見につけている。	
		5 集団での活動において、リーダーシップを発揮することができる。	
		6 自らのストレスと身体の健康を適切に自己管理することができる。	
		7 日本及び外国の文化・歴史、環境問題、平和問題等についての幅広い知識をもっている。	
		教師としての素養	8 教師としての使命感をもち、その役割と職務内容を理解している。
			9 教育に関する社会的・制度的事項を理解し、現代の学校教育の課題を把握することができる。
			10 教育の理念・歴史・思想について理解し、自らの教育観を深めることができる。
	11 教育課程の意義や編成の方法について基本的事項を理解している。		
	12 子どもに対して正しく分かりやすい言葉づかいができる。		
	13 学校生活の様々な場面で子どもの興味・関心・意欲を喚起するための工夫を行うことができる。		
	14 人権を尊重しながら子どもにかかわることができる。		
	15 子どもの安全管理に関する基礎的知識を有し、指導に活かすことができる。		
	16 素直にほかの教師に相談するとともに、他の教師の意見に対して謙虚に耳を傾けることができる。		
	17 主な情報通信機器の利用方法を理解し、教育活動に活かすことができる。		
	18 自らが学校組織の一員であることを理解し、組織内での自らの役割を自覚している。		
	子ども理解に基づく学級経営・生徒指導	子ども理解	19 子ども理解に関する基礎的知識を有し、子ども一人ひとりの理解に活かすことができる。
			20 子ども一人ひとりの特性や心身の状況を生活環境や成育歴を含めて多面的にとらえることができる。
			21 子ども同士の関係や仲間集団を把握し、指導に活かすことができる。
22 公平かつ受容的・共感的な態度をもって子どもにかかわることができる。			
23 特別支援教育に関する基礎的知識を有し、子どもの指導や支援に活かすことができる。			
学級経営		24 学級担任の役割と職務内容に関する基礎的知識をもっている。	
		25 学級経営の意義を理解し、作成することができる。	
		26 子どもとの信頼関係の重要性を認識し、その構築に努めることができる。	
生徒指導		27 教室掲示や座席配置を工夫するなど、子どもが生活や学習をしやすいように教室環境を整えることができる。	
		28 子どもの基本的な生活習慣の重要性を理解し、指導を行うことができる。	
		29 学校の規則や子どもが自分たちで作った決まりを守ることの大切さについて指導することができる。	
	30 子どもの問題行動の背景を多面的にとらえ、対応方法を考えることができる。		
	31 教育相談の意義、理論や技法に関する基礎的知識をもっている。		
	32 キャリア教育の意義を理解し、その指導に必要な理論や方法に関する基礎的知識をもっている。		
教科等の指導	内容理解	33 学習内容の系統性や各学年間のつながり等を含め、学習指導要領の主な内容を理解している。	
		34 教科等の内容に関する専門的知識を有し、実際の指導に活かすことができる。	
		35 教材の内容について分析・解釈し、適切な教材の準備を行うことができる。	
		36 子どもの実態や地域の特色に合わせて教材・教具に工夫を加えたり、新たな教材・教具を開発したりすることができる。	
	授業方法・指導技術	37 主な学習指導方法の長所と短所を理解したうえで、学習の場面に応じて適切な指導方法を選択することができる。	
		38 各教科等の内容に即した指導方法について理解し、活用することができる。	
		39 板書、発問、指示の仕方など授業を行う上での基本的な指導技術を見につけている。	
		40 学習内容の習熟の程度などを踏まえて、個に応じた指導を試みることができる。	
		41 子どもの多様な思考を活かしながら、子どもの協同的な学習を促すことができる。	
		42 授業中の子どもの学習状況や発言に配慮し、柔軟な授業展開を試みることができる。	
		43 各教科等の年間指導計画の内容を理解し、自己の単元計画や本時案に反映させることができる。	
	授業計画	44 単元計画と子どもの実態を踏まえ、学習指導案を作成することができる。	
		授業研究	45 授業研究の重要性を理解するとともに、積極的に取り組むことができる。
			46 子ども学習に対する主な評価の方法を理解し、学習指導に活かすことができる。
連携・協働	他の教師との連携・協働	47 子どもに関わる情報を他の教師と共有する姿勢をもっている。	
		48 様々な場面で他の教師と協働する姿勢をもっている。	
	保護者・地域等の連携・協働	49 学校と保護者・地域・他の専門家・他職種との連携の重要性や役割分担について理解している。	
		50 保護者や地域の声に耳を傾け、誠実に対応する姿勢をもっている。	

本学においては、中教審答申（2006年7月11日「今後の教員養成・免許制度の在り方」）に示された「教職実践演習」の「到達目標及び目標到達の確認指標例」に準拠した到達目標を設定し、それと教育学部が養成する教師像を関連付け、教員として必要な資質能力という大学4年間のトータルな到達目標の項目、要素

等を定めている（表2）。これに基づいてチェック項目を策定し、4年生の前期・後期に自己評価をさせるとともに、学生と指導教員との個人面談等において活用している。

表2 山口大学における履修カルテ

	養成する教員像	項目	要素	チェック項目	
① 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	1. 教師としての強い使命感と倫理観を持ち続ける人	① 使命感責任感	1 教職の意義、責務	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。	
			2 教育理念・教育史・思想	教育の理念、教育の歴史、思想について基礎理論・知識を習得していますか。	
			3 学校教育の社会的・制度的理解	学校教育の社会的・制度的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。	
	4. 常に自己啓発、自己研鑽に努め、幅広い教養と専門的知識、技能を持ち続ける人 6. 社会の変化に適應するための課題探究能力と問題解決能力を持つ人	② 自己研鑽力	4 教職への探究	法令や学習指導要領に関心を持ち、その基礎的な知識・理解の習得に努めていますか。 教育に関する話題に関心を持ち、積極的に学んでいますか。	
			5 問題発見解決力	教職を目指す立場としての自らの課題を認識し、その解決に向けて自己研鑽に励んでいますか。	
			6 体験活動等	教育に関連する体験活動やインターンシップ等に積極的に参加していますか。	
	2. 子どもに対して教育的愛情と責任感を持てる人	③ 教育的愛情	7 教員としての立場	進んで子ども(相手)とかかわりつつ、公平かつ毅然とした態度で接することができますか。	
			8 思いやり、安全・健康への配慮	子ども(相手)の状況を的確に判断し、安全や健康に気配りすることができますか。	
			9 子どもに対する態度	進んで子どもとかかわり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができますか。	
			10 子どもに対する見取り・支援	子ども(相手)の状況を肯定的、支持的に受け止めて、心に寄り添う支援ができますか。	
② 社会性や対人関係能力に関する事項	5. 豊かな人間性と社会性を併せ持ち、幅広い対人関係能力(コミュニケーション能力)を持つ人	④ 社会性	11 行動への信頼性	授業や諸活動に遅刻や欠席などが無い、提出物の期限を厳守するなど、基本的な行動ができていますか。	
			12 マナー、態度	挨拶、服装、言葉遣い、規則等に関し、社会人としての基本が身に付いていますか。	
		⑤ 対人関係能力	13 リーダーシップ	集団で活動する際、リーダーシップを発揮することができますか。	
			14 フォロースhip	集団で活動する際、グループの仲間と協力してリーダーを支え、グループの課題に取り組むことができますか。	
			15 役割遂行	集団で活動する際、自らの役割をきちんとこなすことができますか。	
			16 パフォーマンス	集団で行動する際、積極的に行動を起こしたり、豊かな表情で人ととかかわり合うことができますか。	
			17 論理的コミュニケーション	物事を論理的に考え、言葉によって表現することができますか。また、相手の言葉に耳を傾け、それを理解したり、分からないときは質問したりすることができますか。	
			18 他者意見の受容・協調力	他者の意見やアドバイスに耳を傾けること、理解や協力を得て課題に取り組むことができますか。	
			19 プレゼンテーション能力	自らの考えや調べた結果を他者に適切に伝えるための基礎的な技能を身につけていますか。	
			20 人権尊重	誰にでも陰ひななく接し、人権尊重の精神に立って行動できていますか。	
③ 幼児児童生徒理解に関する事項	3. 教育の専門家として子どもに対する深い理解力と指導力を持つ人	⑥ 子ども理解力	21 発達段階に対応した(相手の状況に応じた)コミュニケーション力	子どもたちの発達段階を考慮して(相手の状況、意欲、希望や願い等を想定して)、適切に接することができますか。	
			22 子どもの生活実態の理解と対応	いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。	
			23 学習者理解	学習者に対する教育的・心理学的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。	
			⑦ 学級経営力	24 基礎理解	学級経営案や学年経営案について理解していますか。
				25 活動理解	日々の学級や学年で行っている教師の仕事を理解していますか。
				26 学級づくり	学習集団の形成に必要な基礎理論・知識を理解していますか。
				④ 教科等々の指導に関する事項	
28 教科指導力	教科指導に関する授業に真剣に取り組む、教科指導についての知識や技能を身につけていますか。				
29 教科書・学習指導要領	取得希望免許に関係する教科書や学習指導要領について理解していますか。				
⑨ 授業実践力	30 授業技術基礎	発問、説明、指示、示範、板書、評価活動、討論づくりなどの授業技術を理解していますか。			
	31 基礎実践力	適切な指導案を作成し、それに沿いながら授業を実施することができますか。(教育実習実施者のみ回答)			
		⑩ 授業評価・省察力	32 創意工夫・学力定着	子どもの実態に応じて指導内容や方法を考え、創意工夫を加えることができますか。(教育実習実施者のみ回答)	
			33 適応力	子どもの反応や質問を活かしながら、集中力を保った授業を行うことができますか。(教育実習実施者のみ回答)	
			34 授業評価力	他者の授業の記録を取りつつ参観し、その授業のよいところ、子どもの発言や行動のよいところを指摘できますか。(教育実習実施者のみ回答)	
			35 省察力	授業評価や授業記録を参考にしながら自らの授業を省察し、後の授業に活かすことができますか。(授業実施者のみ回答)	

2. 教職キャリア形成 I・II

2-1 教職キャリア形成 I・II の授業設計

「教職キャリア形成 I・II」は、本年度から1年生前期の「教職概論」での学びを元に、今後の学校教員に求められる資質能力について実践的に理解するとともに、「学び続ける教員」として歩む、「学び続ける教員」になるための知識技能や実践的態度を身につけることを目的として実施された。この授業の位置づけと概要（図1）と授業内容（表3）は次のとおりである。

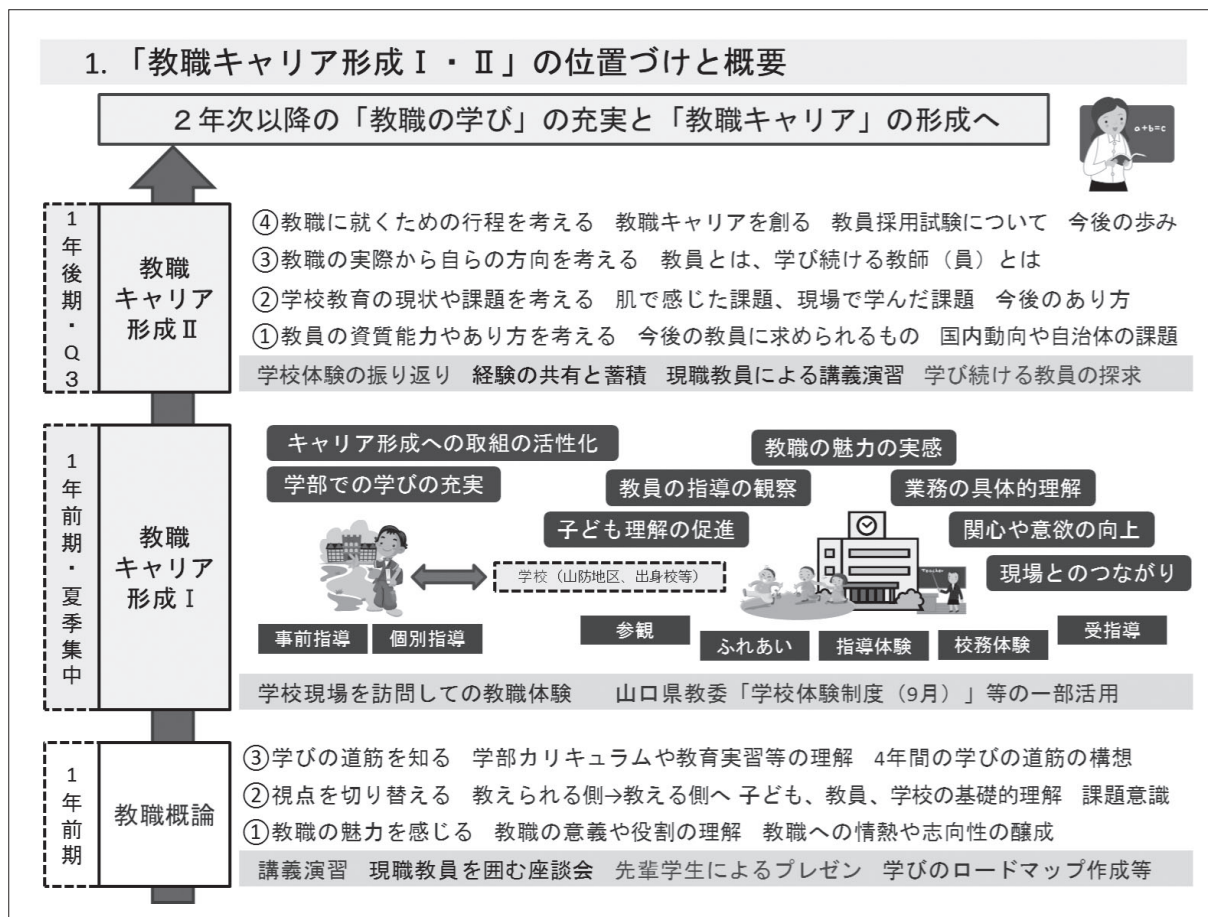


図1 教職キャリア形成 I・II の位置づけと概要

表3 教職キャリア形成 I・II の授業内容

	回	内 容
教職キャリア形成I	1	オリエンテーション（全体） ・授業の概要説明
	2	教職体験事前指導
	3～8	各学校現場等における教職体験の実施（県・市教育委員会と連携）
教職キャリア形成II	1	オリエンテーション（全体） ・授業説明、グループ編成と学習組織づくり
	2	「学校体験を通して感じた現在の教育課題」の実践発表と研究協議（班別学習）
	3	「学校体験を通して感じた教員に求められる資質能力」の実践発表と研究協議（班別学習）
	4	「学校体験をとおして感じた教育課題、教員の資質能力」のプレゼンと協議
	5	「これから教員をめざす人たちへの期待」（全体 講義演習）
	6	「教職の意義、使命と学び続ける教師とは」（全体 講義演習） ・教職の魅力、意義、使命と「学び続ける教師」、今後のあり方等
	7	「教職キャリア形成の現状と課題」（全体 講義演習） ・教職の現状、教員採用の動向と教員採用試験の実際や今後のあり方
	8	総括的指導とテスト

2-2 「教職キャリア形成 I・II」で学生は何を学んだか

2-2-1 学生の学びの集計の方法

1年生を対象に実施した「教職キャリア形成 I・II」は、教職について実際に体験し、省察することで、必要とされる資質能力について自覚させていくことを目的としている。本授業の最後に実施したテストでは、「教職キャリア形成 I・II」を通して感じた教員に必要な資質能力を6つ取り上げさせ、その内容を記述させた(181名がテストを提出)。

そこで、このテストの記述内容が本学の履修カルテの要素の何に該当するかを分析した。記述内容を履修カルテの項目と照合するにあたって、要素の内容例を参照した。この要素の内容は、履修カルテのチェック項目と兵庫教育大学が作成した教員養成スタンダードを基本にし、さらに筆者が必要と思う事柄を加え作成したものである(表4)。

なお、学生が記述した一つの「資質能力」の中に、二つ以上の要素が含まれる場合は、それぞれの要素として数えた。

表4 履修カルテ要素の内容例

項目	要素	内容例
① 使命感・責任感	1 教職の意義・責務	・教師としての使命感 ・教師の役割と職務内容の理解 ・子どもに対する責務 ・状況に応じた判断力
	2 教育理念・教育史・思想	・教育理念、教育の歴史、思想について基礎理論・知識
	3 学校教育の社会的・制度的理解	・教育に関する社会的・制度的事項の理解 ・現代の学校教育の課題の把握 ・日本及び外国の文化・歴史、環境問題、平和問題等についての幅広い知識
② 自己研鑽力	4 教職への探究	・長期的視野に立った自らの職能成長 ・法令や学習指導要領の基礎的な知識・理解 ・研究活動を通じた専門性の向上 ・教育理念・歴史・思想についての理解と自らの教育観を深化 ・教育課程の意義や編成の方法についての基本的事項の理解 ・教育に関する話題への関心と理解
	5 問題発見解決力	・幅広い視野による問題発見 ・常に自らの学びを省察による課題認識 ・課題の解決と省察
	6 体験活動等	・教育に関連する体験活動やインターンシップ等の重要性の認識
③ 教育的愛情	7 教員としての立場	・子どもに対する公平かつ受容的・共感的な態度 ・子どもに対する毅然とした態度
	8 思いやり、安全・健康への配慮	・子どもの安全管理に関する基礎的知識 ・安全や健康への配慮
	9 子どもに対する態度	・子どもへの積極的な関わり ・子どもの興味・関心・意欲を喚起するための工夫 ・子どもへの親しみを持った態度・支持的な態度
④ 社会性	10 子どもに対する見取り・支援	・子どもの問題行動の背景への多面的なとらえ ・諸問題に対する多様な対応方法を考えること ・教育相談の意義、理論や技法に関する基礎的知識 ・子どもの心に寄り添う支援
	11 行動への信頼性	・自らのストレスと身体の健康の適切な自己管理 ・時間の管理 ・他人から信頼される行動や態度 ・日本及び外国の文化・歴史、環境問題、平和問題等を含む一般教養
	12 マナー、態度	・言葉遣い、挨拶、礼儀、マナー、服装など常識的な言動
⑤ 対人関係能力	13 リーダーシップ	・集団での活動におけるリーダーシップ
	14 フォロワーシップ	・グループの仲間と協力してリーダーを支えること
	15 役割遂行	・自らが学校組織の一員であることへの理解 ・組織内での自らの役割の自覚と遂行(組織的な対応) ・他者との協力・協働
	16 パフォーマンス	・積極的な行動、協力的な態度 ・豊かな表情
	17 論理的コミュニケーション	・論理的な思考と表現 ・討論による相互理解
	18 他者意見の受容・協調力	・他の教員や保護者・地域住民とのコミュニケーション ・子どもに関する情報を他の教員と共有する姿勢 ・学校と保護者・地域・他の専門家・他校種との連携の重要性と役割分担の理解 ・保護者や地域の声に耳を傾け、誠実に対応する姿勢
⑥ 子ども理解力	19 プレゼンテーション能力	・他者へ自分の考え等を伝える基礎的な技能
	20 人権尊重	・人権尊重の精神にたった行動
	21 発達段階に対応した(相手の状況に応じた)コミュニケーション力	・子どもに対する正しく分かりやすい言葉づかい ・子どもの基本的な生活習慣の重要性を理解と指導 ・発達段階を考慮した対応
⑦ 学級経営力	22 子ども生活実態の理解と対応	・子どもの発達に関する基礎的知識 ・子ども一人ひとりの特性や心身の状況、生活環境や育成歴を含めた多面的な子ども理解 ・特別支援教育に関する基礎的知識と支援
	23 学習者理解	・子ども同士の関係や仲間集団の把握と指導 ・学習者に対する教育学的・心理学的理解に必要な基礎理論・知識
	24 基礎理解	・学級担任の役割と職務内容に関する基礎的知識 ・学級経営案の意義の理解
⑧ 授業構成力	25 活動理解	・教室掲示や座席配置を工夫 ・子どもが生活や学習をしやすい教室環境の重要性の理解 ・教員の日常業務の理解
	26 学級づくり	・子どもとの信頼関係の重要性の認識とその構築 ・学校の規則や決まりを守ることの大切さとその指導・学習集団の形成に必要な基礎理論・知識
	27 教科の専門的知識・技能	・教科等の内容に関する専門的知識と技能 ・子どもの実態や地域の特色に合わせた教材・教具の工夫と開発
⑨ 授業実践力	28 教科指導力	・教材の内容について分析・解釈 ・適切な教材の準備 ・各教科等の内容に即した指導方法についての理解
	29 教科書・学習指導要領	・学習内容の系統性や各学年間のつながり等を含め、学習指導要領の主な内容の理解 ・教育課程の意義や編成の方法について基本的事項の理解 ・各教科等の年間指導計画の内容を理解し、自己の単元計画や本時案への反映
	30 授業技術基礎	・発問、説明、指示、示範、板書、評価活動、討論づくりなど授業を行う上での基本的な指導技術 ・ICT機器の利用方法の理解と活用 ・主な学習指導方法の理解と適切な指導方法の活用
⑩ 省察力・業	31 基礎実践力	・単元計画と子どもの実態を踏まえた学習指導案の作成 ・授業計画にそった授業の展開
	32 創意工夫・学力定着	・学習内容の習熟の程度などを踏まえた個に応じた指導 ・子どもの実態に応じた指導の工夫
	33 適応力	・子どもの多様な思考を活かした協同的な学習の推進 ・授業中の子どもの学習状況や発言に配慮した柔軟な授業展開 ・子どもの反応や質問を活かした集中力を保った授業
省評⑩	34 授業評価力	・子どもの学習に対する主な評価の方法を理解と活用 ・授業及び子どもの発言や行動の評価
	35 省察力	・授業研究の重要性の理解と積極的に取り組む態度 ・自らの授業の省察

2-2-2 要素別にみた学生の学び

履修カルテの要素ごとに、関連する記述をした学生の割合を求めた（図2）。

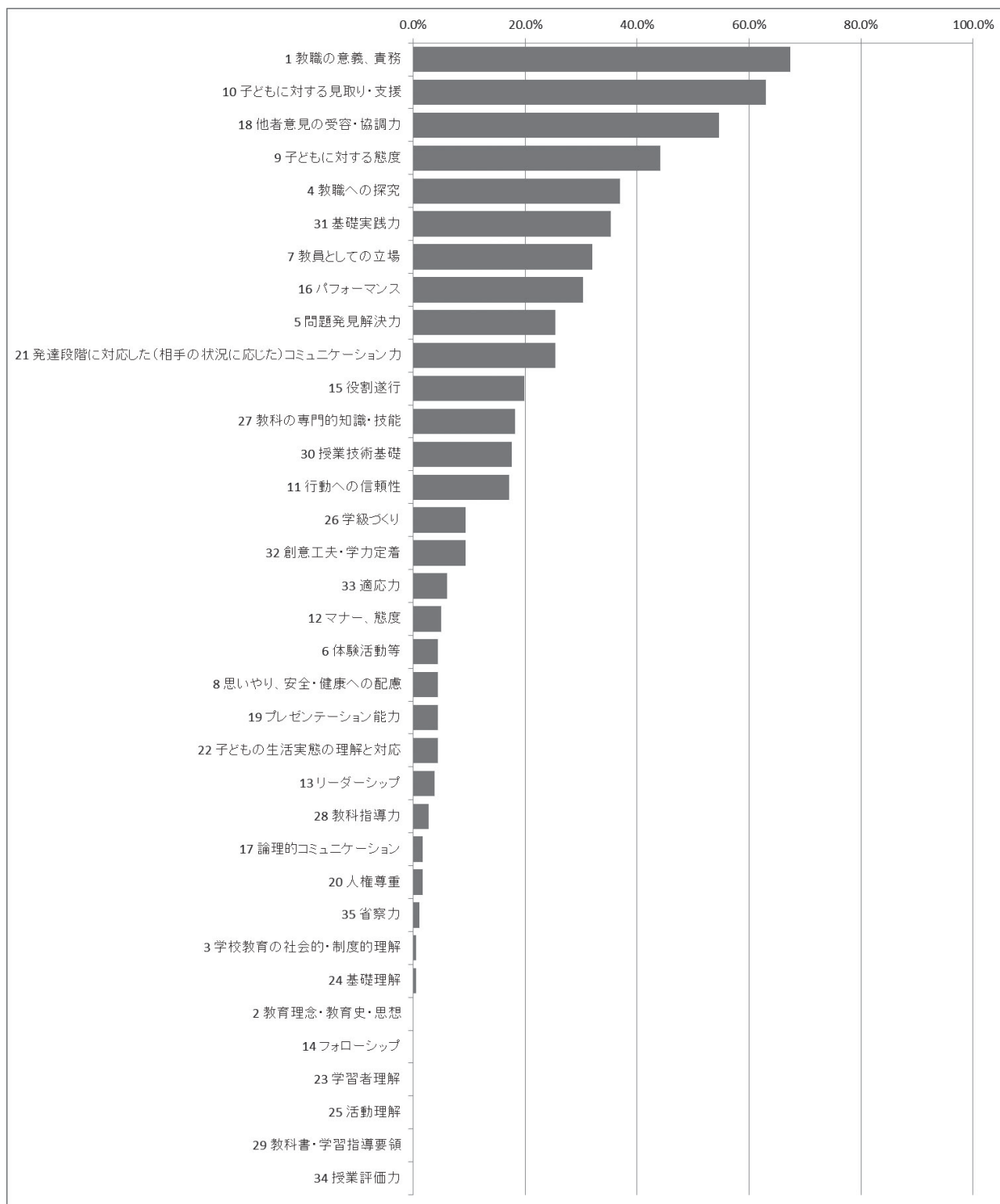


図2 履修カルテ要素別にみた学生の回答状況

このうち「2 教育理念・教育史・思想」「14 フォローシップ」「23 学習者理解」「25 活動理解」「29 教科書・学習指導要領」「34 授業評価力」は、学生の記述がなく、「3 学校教育の社会的・制度的理解」「24 基礎理解」について記述した学生は、それぞれ1名（学生数の1%以下）である。これら記述の少ない要素は、「14 フォローシップ」を除いては、主に座学で学ぶことであり、まだ、これらについて

て学んでいないか、または学んだことと結びついていないかのどちらかであると予想される。しかし、「3 学校教育の社会的・制度的理解」が重要だとした学生は、「教職に就く以上、絶対に教職に対する知識がなければやっていけない。しっかりと今、学校制度はどうなっているかを知ることが必要であり、これを知っていることが教員としての大前提である。」と記述している。今後の授業において教育に関する知識・理論と学校での実習体験が結びつけていくことが求められる。

次に、学生の半数以上が記述した教員の資質能力として求められる要素について考察していきたい。

1番目は、「1 教職の意義、責務（使命感・責任感）」であり、学生の67.4%が重要として記述した。この要素の内容例としては「教師としての使命感、教師の役割と職務内容の理解、子どもに対する責務、状況に応じた判断力」である。学生の記述では、「自分がなぜ教師になりたいのか、子どもたちをどのように育て教育したいのか、将来の日本の教育にどのように関わっていきたいのかを考えるべきだと思いました。」「教師としてどうしたいかという”doing”より、教師としてどうあるべきかという”being”をしっかりと考えることが大切だ。「どうあるべきか」を大切に子どもと向き合い、それによって初めて「どうしたいか」ということが意味をもつ。」など教師としての責任の重要性について書かれている。また、いろいろな状況下における判断力や職責を果たすための自己管理の重要性について触れる記述も多く見られた。

2番目は、「10 子どもに対する見取り・支援（教育的愛情）」であり、学生の63.4%にのぼる。この要素の内容例は「子どもの問題行動の背景への多面的なとらえ、諸問題に対する多様な対応方法を考えること、教育相談の意義、理論や技法に関する基礎的知識、子どもの心に寄り添う支援」である。これらは、子どもの言動や様子から子どもの状況を読み取り、支援する教育相談の中心的な機能である。学生の記述としては、「子どもと向き合うことで、その子どもが今何を頑張っているのか、何につまずいていたり、不安をいっているのかを知る必要がある」「子どもの体調、様子、学習理解度、得意なこと、友達関係など、子どもをいろいろな場面で観察をし、その子にあった対応の仕方を工夫する。ちょっとした変化に気づく」「教員とはとにかく子どもと向き合う仕事、その子が今何を考え、どのようなことを感じているのか、何を抱えているのかということをしかりと理解し、柔軟に対応することが必要。教員が児童を分かろうとせず、上から支持を出すなど押さえつけはあってはならない」などがみられた。こうした記述が多かったのは、学校体験等により子どもと直接触れ合う機会に恵まれ、子どもたちと意思疎通をするためには、とにかく寄り添って理解していくことが必要であることを感じたからではないかと考えられる。

3番目は、「18 他者意見の受容・協調力（対人間関係力）」であり、学生の54.7%である。内容例は、「他の教員や保護者と協力・協働すること、子どもに関わる情報を他の教員と共有する姿勢、学校と保護者・地域・他の専門家・他校種との連携の重要性と役割分担の理解、保護者や地域の声に耳を傾け、誠実に対応する姿勢」とし、教員同士をはじめ、保護者、地域住民、関係者と連携するために、コミュニケーションをとることの重要性に関する記述は、この要素に該当する。学生の記述では、「子どもはもちろん、親や地域、同僚、学年団、学校といろいろな関わりがあり、それらと密接につながって、お互いに協力しなければ、よい教育ができない。」「先生は、生徒や保護者など多くの人と直接かかわる。そのとき、円滑にコミュニケーションをとることが求められるだろう。話す力だけでなく傾聴力も必要になる。」「教員同士のコミュニケーションをしておかなければ、他のクラスの子とかのことが分からないし、支え合うということができない。」といった記述がみられた。多くは、教員間、保護者・地域との連携・協力の必要性が記述されており、そのためには、意見を言うことばかりでなく、他の意見を聞くことの大切さに触れていた。学校現場で様々な課題に対して取り組む教員の姿をみたことや「教職キャリア形成Ⅰ」での学校体験がちょうど運動会の時期にあたり、教員が一致団結して行事を作り上げていく姿や保護者・地域と連携して取り組んでいる姿を教員の目線で見ることができたことが影響していると考えられる。

2-2-3 項目別にみた学生の学び

履修カルテの項目別にみた学びはどうだったのであろうか。

どの項目が多く学ばれていたかを見るために、項目ごとに要素数が違うため、要素における回答する項目ごとに合計し、学生数と項目数で除して1項目あたりの記述率を求めた。その結果を図3に示す。

これを見ると、相対的に学生が多く学んだと思われる項目は、「③教育的愛情」が一番多く、35.9%である。構成する要素別では、「7 教員としての立場」32.0%、「8 思いやり・安全・健康への配慮」4.4%、「9 子どもに対する態度」44.2%、「10 子どもに対する見取り・支援」63.0%である。

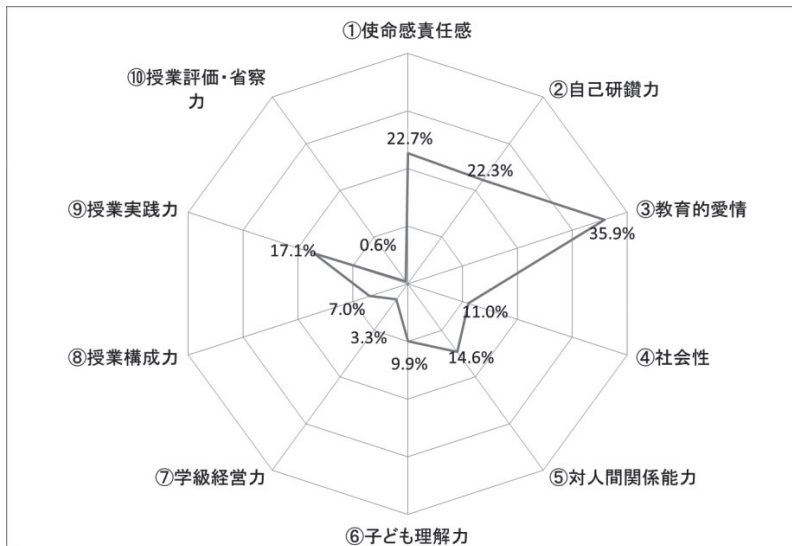


図3 履修カルテ項目別にみた学生の回答状況

次に「①使命感責任感」で、22.7%である。構成する要素別では、「1 教職の意義・責務」67.4%、「2 教育理念・教育史・思想」0%、「3 学校教育の社会的・制度的理解」0.6%である。

最後は、「②自己研鑽力」で、22.3%である。構成する要素別では、「4 教職への探究」37.0%、「5 問題解決力」25.4%、「6 体験活動等」4.4%であった。

「教職キャリア形成Ⅰ」の学校体験では、教育実習のように実際に学級に入り、学級経営にふれたり、授業を実施したりする機会がほとんどないため、これらの項目について意識が向けられ

ることが少なかったのであろう。また、体験期間も5日間程度と少ないことも影響していると考えられる。

本講座は、今後の学校教員に求められる資質能力について実践的に理解するとともに、「学び続ける教員」として歩む、「学び続ける教員」になるための知識技能や実践的態度を身につけることを目的として実施された。学生の記述から見える学びにおいても目的を達成していると言えるだろう。

3. 今後の課題について

本講座「教職キャリア形成Ⅰ」では、本学学生180人が、山口県教育委員会が主催する「学生の学校体験制度」や本学が実施している「ちゃぶ台プログラム」における学校チューター活動等を活用して、県内では37の学校で体験実習を行うことができた。

受け入れた学校においても、「このような実習は大学生にとっても教職員にとってもよい機会になります。特に児童にとってはよい刺激となりました。今後ともぜひ続けていただきたいと思います。学校でも受け入れ体制を整えて努力したいと思います（小学校）」「教育実習の前段階として授業指導以外の教育活動を体験することは有効であると思う。多くの教員が気軽にかかわり助言する姿がよく見られ、教職員全体に元気をもらえる機会であった（中学校）」「教育実習と異なり、学生の資質や意欲を自然に見ることができること、また、教員の意識を高める面でもよい刺激になったと思う（高等学校）」等、肯定的な意見が多い。

しかしながら、実施校との打ち合わせ会においては、教育実習や学校ボランティアとの違いが分かりにくいなどの意見もあった。この点は、学生自身においてもいえるかもしれない。まだ大学生になって数か月で高校生気分のまま学校に行き、服装等を注意されることもあったため、事前指導を念入りに行う必要がある。そして、本講座の目的を学生に十分周知する必要がある。また、受け入れ校についても、この授業により学生につけたい力をしっかり納得してもらうことが必要である。

また、学生の記述の中には、「多忙な学校現場、疲弊する教員」「モンスターペアレントの対応」などが目に付いた。学校現場は多忙なので自己管理をしなくてはならない、強い精神がないと務まらない等、ネガティブなイメージのみを学校体験によって学生が得たのであれば残念である。学校体験直後では、子どもがかわいい、大変だけどとても楽しかった等の声も学生からは上がっていることから、体験校の教員から、教員のやりがいなどを少しの時間で、懇談する時間が設けられるとよい。学生さらには現場の教員の省察の機会にもなると考えられる。

最後に、2年生以降の授業や教育実習によって、履修カルテの項目の現在低くなっている部分が補完されていくものと思われる。学生には常に履修カルテの項目を意識させ、省察をする思考方法を日常化させ、理論と実践の往還を繰り返すことで、彼らの反省的な学びを深めていきたい。

引用文献

- 1) 岩田康之・別惣淳二・諏訪英広：小学校教師に何が必要か コンピテンシーをデータから考える，東京学芸大学出版会，10-11，2013.
- 2) 前出：46-47，2013.
- 3) 別惣淳二，渡辺隆信 編，兵庫教育大学教員養成スタンダード研究開発チーム 著：教員養成スタンダードに基づく教員の質保証 学生の自己成長を促す全学的学習支援体制の構築，ジヤーズ教育新社，53-55，2012.

参考文献

教育職員養成審議会「教員の資質能力の向上方策等について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315356.htm, 1987. 12

教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm, 1997. 7

教育職員養成審議会：「養成と採用・研修の連携の円滑化について（第三次答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315385.htm, 1999. 12

中央教育審議会：「今後の教員養成・免許制度の在り方（答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm, 2006. 7

中央教育審議会：「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/08/30/1325094_1.pdf, 2012. 8

中央教育審議会：「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2015/12/28/1365665_01.pdf, 2015. 12

山口県教員養成等検討協議会，山口県教育委員会：「山口県の実情に応じた教員の養成・育成の在り方について（報告書）」

<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/5/4/2/5423d942b9e67a5457dce026888a4d85.pdf>, 2015. 3

霜川正幸他：「『教職概論』における授業改善の実際」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第33号，77-83，2012. 1

大平泰子他：「教員に求められる資質能力とは—小学校教員における資質能力の構成要因に関する文献レビュー—」，富山国際大学こども育成学部紀要，31-42，2010. 3

那須川知子，渡辺隆信 編，兵庫教育大学教員養成カリキュラム改革委員会 著：教員養成と研修の高度化 教師教育モデルカリキュラムの開発に向けて，ジヤーズ教育新社，2014.